

リフレクションを促す学習環境のデザイン指針

大島 純*

Design Guidelines of Learning Environments to Foster Reflection

Jun OSHIMA*

This paper is aimed at discussing a concept of reflection as an activity to facilitate human learning and how we can support learners to engage in appropriate reflection on their learning activities. First, the author argues that learners are required to be involved in scrutinizing their own learning practice to develop their adaptive expertise. Second, a theoretical framework for researchers to examine learning environments from the adaptive expertise perspective is introduced, i.e., knowledge building environments for knowledge creation. Finally, several studies that develop scaffolding supports for learners to engage in knowledge building practices are examined for articulating what guidelines are hidden behind the development.

キーワード：リフレクション, 学習環境, 適応的熟達化, 知識構築, 知識創造

1. はじめに

リフレクション（日本語では「内省的思考」あるいは省察と呼ばれる）が学習支援研究の対象となって久しい。学習支援システムの開発におけるリフレクションの歴史はまだ浅いが、学習（特に成人の学習）においてリフレクションは長く議論されてきた。さまざまな研究において多様に利用される概念であるので、本稿においては、まずこの概念の整理から始めたい。今回の議論は、リフレクションの研究を十二分に網羅したうえで定義というよりは、筆者の関連する研究領域に限ったうえでの議論であることをまずは断っておきたい。

1.1 成人教育におけるリフレクション

成人教育、あるいは社会実践学習においてリフレクションの概念が重要視されるようになったのは、Schönの「反省的実践家（Reflective Practitioner）」の研究⁽¹⁾によるところが大きい。多様な専門家がどのように自らの熟達化を展開しているのかについて、事

例をもとに分析議論したものである。ここでリフレクションが議論される時、タイプは大きく二つに分かれる：一つはreflection-in-actionと呼ばれるもので、実際に実践家が自らの実践の最中にその活動の生産性を向上させることを目指して活動の分析と改善を試みるものである。もう一つは、reflection-on-actionと呼ばれるもので、実践終了後に広く活動を振り返りながら、次の実践でどのような改善が検討されるべきかについて省察を繰り返すものである。Schönによれば、反省的実践家は、こうした二つのリフレクションを意識的かつ頻繁に行いながら自らの熟達化を促進しているという。

この二つのリフレクションは、必ずしも同じ内容を違う時間軸（細かくあるいは大雑把に）で省察しているというだけの違いを示しているのではなく、実践家が自らの熟達化を促進するための二つの異なる層だと考えられている。Argyris & Schönは、この二つの層における実践家の学習をsingle-loop learningとdouble-loop learningという概念で説明している⁽²⁾。single-loop learningでは、reflection-in-action

*静岡大学情報学部（Faculty of Informatics, Shizuoka University）